

空知の炭鉱文化と炭鉄港の取組

管内の炭鉱の歴史は、明治12（1879）年に幌内炭鉱（三笠市）が開鉱したことから始まりました。その後、最盛期には100を超える炭鉱が稼働していましたが、昭和30（1955）年以降の石炭鉱業の合理化により、閉山を余儀なくされました。空知においても、平成7（1995）年3月の空知炭鉱（歌志内市）の閉山で坑内掘りはなくなりましたが、現在、4市町で露天掘りにより石炭が産出されています。

産炭地域では、「北海道遺産」や「近代化産業遺産」に認定された炭鉱関連施設や炭鉱に関する様々な文化等を活用した地域づくりが行われてきました。さらに令和元（2019）年5月、空知の「石炭」、室蘭の「鉄鋼」、小樽の「港湾」、それらを繋ぐ「鉄道」を舞台に繰り広げられた「炭鉄港」のストーリーが日本遺産に認定され、広域的な連携による取組が活発化しています。

<日本遺産「炭鉄港」の概要>

北海道は、明治初期から昭和の高度成長期までの100年で、人口が100倍となる急成長を遂げました。その中核となったのは石炭というエネルギーであり、そこから派生する鉄鋼・港湾・鉄道を含めた近代化産業遺産の物語が日本遺産「炭鉄港」です。

歴史をたどるための手がかりは100km内外の範囲に多数存在しており、当時の繁栄の足跡が、本物の産業景観として今でも数多く残っています。



【住友奔別炭鉱立坑櫓・周辺施設：三笠市】



【旧火力発電所（日本製鋼所）：室蘭市】



【小樽港北防波堤：小樽市】



【蒸気機関車D51 320号機：安平町】

【主な炭鉱関連施設】

○北炭幾春別炭鉱錦立坑櫓（三笠市）



大正8（1919）年完成。
高さ約10m、深さ214m。
現存する立坑としては道内最古。
三笠ジオパーク野外博物館のルート上にあり、付近では、立坑櫓と地中で繋がっていた旧錦坑坑口や石炭層などを見ることができる。

○三菱美唄炭鉱堅坑櫓（美唄市）



大正12（1923）年完成。
高さ20m、深さ約170m。
道内で2番目に古い立坑。排気・人員搬入用と排気・石炭搬出用の2本の立坑が並んでいる。
鮮やかな紅色が美しい立坑で、建設当初の色と言われている。現在は、立坑を中心とした炭鉱メモリアル公園として利用され、美唄出身の世界的彫刻家 安田侃氏の作品も展示されている。

○旧北炭滝之上水力発電所（夕張市）



大正14（1925）年運転開始。
1,200kw2台の発電機により稼働していた。
レンガ壁と白で縁取りされたアーチ窓の外観が印象的で、正面の窓上には北炭の社章をかたどる星印の色ガラスが収まっている。
平成6（1994）年に北海道企業局に譲渡された後、発電機の更新等が行われ現在も稼働、旧発電所は備品庫として活用されている。

○住友赤平炭鉱立坑櫓（赤平市）



昭和38（1963）年完成。
高さ43.8m、深さ650m。総費用約20億円をかけて建設。
平成6（1994）年の閉山時まで使用された。完成当時は「東洋一」の立坑と評された。建屋や各種機械、電気系統設備などが閉山当時のまま残されている。平成30（2018）年には、赤平市炭鉱遺産ガイド施設が併設され、1日に2回、元炭鉱マンのガイド付きで見学することができる。